新潟大学教育学部附属教育実践研究
指導センター研究紀要，5 (1986)

絵画指導における資料作成

青 柳 三 郎*

I 教師自作の資料

子供たちが絵画制作をする時、発想から表現段階にいたるまで、彼等の願望や悩みを解決してやるためのしげき材として、教師が自作する資料を与えることにより、表現活動を活発にさせることが出来る。

資料としては、教科書、掛図、市販の視聴覚教材等多種多様なものがある。それをそのまま利用できる資料も多いが、その利用方法は、知的理解をさせる場合に役立つことが多い。

ところが、子供一人ひとりの情感や感覚に合うものを具体的に享受させる資料となると、市販されているものでは適切さを欠くことがある。そこに、教師が資料を自作して与える必要性が生じてくるのである。

子供一人ひとりの特性や、悩み、願いを把握しているのは、目の前にいる子供を知り盡している担任教師である。担任教師が作る資料で、子供の創造活動を効率よく高めることが出来るのである。

本論に掲げる資料作成例は、子供が創作上体験すると思われる問題を予測し、それを感覚的にしかも具体的に解決させるために開発したものである。

本編の例題は著者が作成し、本学部小学校教員養成課程の2年次学生に提示したものである。又、図版は学生が作った資料例である。

教師自作の資料作成にあたっては、子供がかかえる問題を解決してやるために、日々創意に満ちたものを作り出してやることが大切である。それは又、子供の悩みを解決してやろうという意志が強いほど、新鮮な資料が生み出されるものである。

II 資料作成のポイント：資料提示の在り方

1. 資料は表現達成の手段である

学習指導の目標に適合する資料を、作成したり選択すべきである。よい資料が見つかったので、その内容をそのまま学習指導の目標にするのでなく、既に設定した学習指導の目標を達成させるためのしげき材・手段として、資料の役割を考慮する。

2. 子供に同一化する資料

子供の発達段階に即し、子供の諸能力、特性、願い、創造性等に同一化できる資料であること。いわば子供にとって理解し易い資料であること。

3. 主体的表現をさせる資料

資料作成の基準には ①子供の願いや悩みを基準に ②子供のたてた目標を基準に ③教師の願いも含めた内容を基準に等がある。いずれにしても、資料作成の価値基準となるのは、子供を主体的に表現させることを考慮し、大人の考える価値観を押し付ける資料づくりにならないこと。

* 新潟大学教育学部

4. 資料の内容の難易度

資料の内容が子供にとって難し過ぎても、易しすぎてもいけない。一般に半知教材と言われるように、子供が資料とかかわった時、出来そうだと意欲的になれるものが良い。反対に出来ないと思わせてはならない。過去に経験して分かり過ぎたものでも、表現不可能と思わせるものでもいけない。

5. 資料の種類

参考作品、教科書、掛図、視聴覚教材、教師自作の資料等、多種多様である。

知的理解をさせる資料……教科書や掛図等にある技法の紹介例。

感覚的に理解させる資料……各種資料の他、教師自作の資料が効果的である。

6. 学習過程と資料

導入時における意欲喚起のため、構想段階時における計画立案のため、展開時における技法理解のため、鑑賞時における鑑賞や反省のため……等、学習週程のあらゆる段階に、適時適数の資料を選択して活用することが出来る。

7. 用意する資料の数等

一時間に用意する資料は、クラス全員にかかわるもの、グループにかかわるもの、一人ひとりにかかわるものがある。数や種類を多く用意しなければと、苦労を意識する以前に、資料は子供一人ひとりの主体的追求を補佐するためであると考えていけば、自然に数や種類が決められてくる。資料１点や１種類の場合には、教師主導型の授業になり勝ちである。反対に資料が多すぎる場合、資料に振り回されてしまい、授業を混乱に陥れることがある。

8. 資料の選択方法

一時間に提示される資料は、子供の反応の動きに適応した内容の資料を選択する。時間内に用意した資料を予め計画した通りに、全部提示しようとする構えよりも、子供の強い要求を察知し、用意した資料の中から選択しつつ、授業を進めるのである。従って、時には、用意した資料を本時で使わないことがあるのは当然である。

9. 資料提示の時間・方法・時機

使用する資料の目的によっても違うが、資料を長時間提示する方法と、短時間提示する方法がある。創造性を主眼としたのに、資料を長時間提示してしまい、資料通りの表現に陥し入れるのは、資料による悪影響であり、資料提示の方法の誤りである。子供の想像を広げる場合、資料を短時間提示し、後は一人ひとりの想像に委ねると効果的である。また、資料を提示する時機は、子供の疑問や悩み、要求の高まりを見計らって行うのである。

10. 資料を感得させる伝達方法

図画工作科は、言葉で説明しても理解出来ない内容が多い教科である。そのように、感覚的、情緒的に理解をさせるために、資料づくりをするのである。言葉による伝達よりも、資料を通して感覚的に伝わったかどうかを見きわめて行くことが大切である。

11. 資料の保存

資料の保存と整理をする。これは他クラス、他学年で作成した資料を、共同で保存し整理するとよい。

Ⅲ　資料を開発するために教師への課題例

【例題１　形を明瞭に表現する方法】（高学年向け）

中学年から高学年にかけて、線描は意志通りにできるが、彩色になると形が崩れたり不鮮明、不明瞭になり、失敗感を抱く子供がいる。そこで、彩色しても形が不明瞭にならない方法を理解させる資料を、下記の手順によりＡ図からＤ図までつくりなさい。

Ａ図 ── 絵の具を塗ったら、形と地の色が混じりあって形が崩れ、不明瞭になった資料。

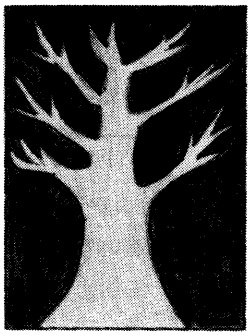
Ｂ図 ── Ａ図のようになってしまった絵の形の部分を、もう一度彩色しなおし、形を明瞭に表現させるための資料。

Ｃ図 ── Ａ図のようになってしまった絵の背景のうち、形の外側の地の部分全体にもう一度彩色しなおし、形を明瞭に表現させるための資料。

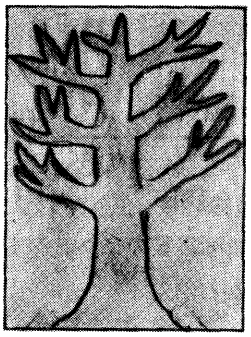
Ｄ図 ── Ａ図のようになってしまった形の輪郭を、細い線で加筆し、主題を明瞭に表現させるための資料。

Ａ　図

Ｂ　図



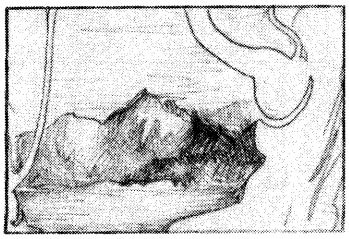
Ｃ　図



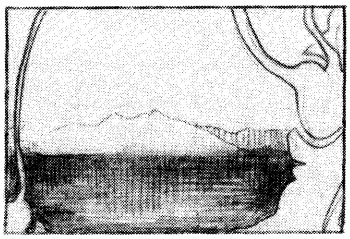
Ｄ　図

【例題２　風景画における遠景・中景・近景】（高学年向け）

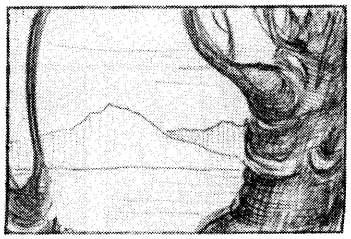
風景画では、遠景、中景、近景のうち、どれか一つにねらいを定めてかくことがある。それを理解させるために、同一の視野に映る風景を想定し、Ａ図には遠景に、Ｂ図では中景に、Ｃ図では近景にそれぞれ主題を置いた資料をつくりなさい。



Ａ図　遠　景



Ｂ図　中　景



Ｃ図　近　景

（解説）　この作者は、遠景や中景、近景とする場所を黒く塗り分け、主題のポイントを印象づけるような資料を作成している。又、よく見ると、遠景で山を、近景で樹の形を大きめにとらえてかき変えていることも、主題を理解させるための工夫といえる。

【例題３　全体と部分のかかわり】（高学年向け）

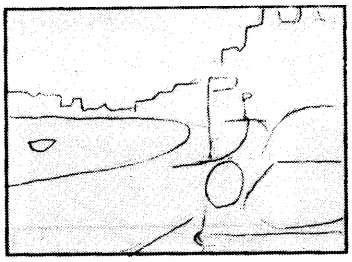
絵をかき進める方法に、部分毎に仕上げるのでなく、画面の全体と部分の均衡や調和を考慮しながら、かき進める事を理解させる資料をつくりなさい。

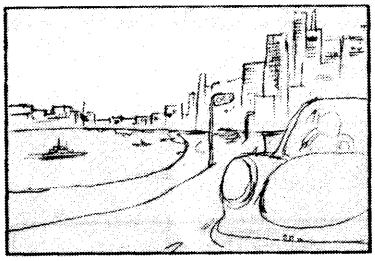
例１　形の大まかなものから細密なものへ。

例２　遠くの形を先にかき、近くの形を重ねるように。

例３　絵の主調色を画面全体に彩色してから、同類色でかきあげる。
（暗い色から明るい色へとかき進める。）

作例１－１





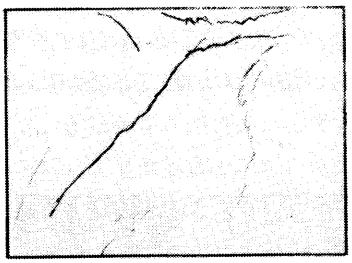
（説明）

まず風景のアウトラインをつかむ。

遠い方から順々に細かい部分を加えていく。

近いところの細かい点もかき明暗をつける。

作例１－２



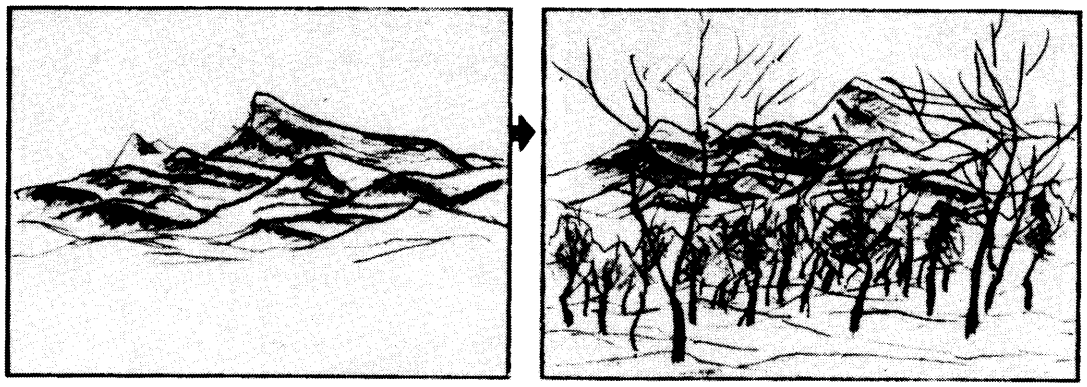
（説明）

中心となる川、おおよその形をまず描く。

遠くの形、細い所を徐々にかき加えていく。

仕上げとして全体の調和を考えながら、細い部分をかき重ねる。

作例 2



山を遠景としてまず描く。

山をまず描き、その前の中景にあたる木々をかく。最後に近景にあたる木を描いた。

作例 3

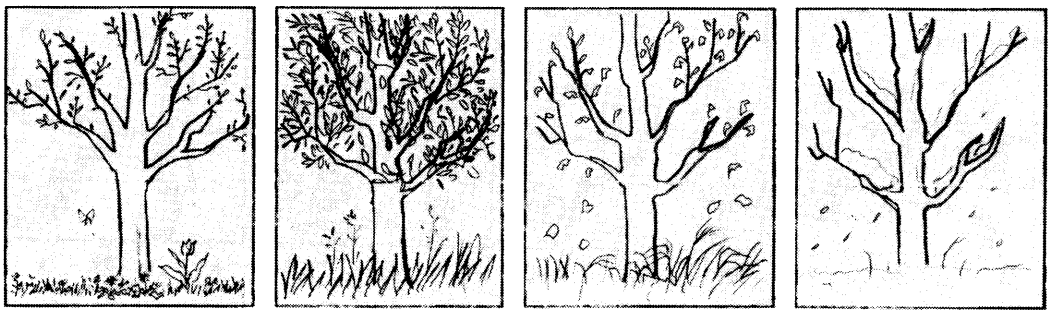
（説明）

森、空の色を主調色として彩色し、その後、樹木の間の暗い部分を彩色した。木の幹は白く残す。

【例題 4　風景画の季節感・天候】（高学年向け）

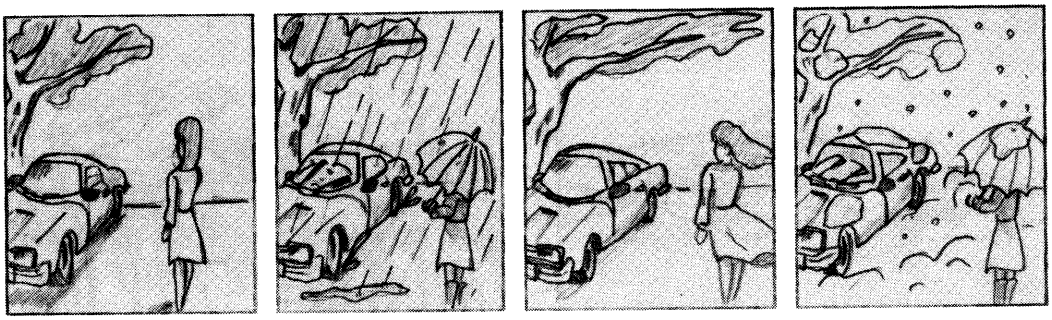
風景画で季節感や天候状況をかかせるための資料（高学年向き）　※テーマは各自きめる

作例 1



春　　夏　　秋　　冬

作例2



晴　れ　　雨　　風　　雪

【例題5　加除修正等】（高学年向け）

ある風景画をかく時、同じ場所でも、主題のとらえ方によって、いろいろな形体を加除修正したり移動、強調、省略することを理解させるために、次の資料をつくりなさい。A図には写真的実景図をかき、B図には主題に添った操作を加えた資料にしなさい。

又、下の説明の欄にはどのような主題を表すために、どのような造形的思考を働かせて、A図をB図に変えたか説明しなさい。

A　写真的実景図　　B　主題に添ってかいた絵

（説明）

湖の向こうに見える山の景色をかきたかったのに、いちばん格好がよく見える位置からだと、木が一本邪魔であり、そのままかくと、いかにも木をかいたように見れなくもない。そこで、実際にある木を取り除き、右側の低木を気持ち、大きくかいた。

【例題6　近景に添加する】（高学年向け）

構成画で「風景」を表現する時、実在する風景だけでは、味わいがないことがある。そこで、別のところに咲いている草花や樹木等を近景に挿入すると、風景が生きてくることを理解させる資料をつくりなさい。

先ず、かきたい風景を画面に鉛筆で線描する。

次に、近景に樹木や草花をかきいれ、その形を黒く塗りつぶす。主題の風景が、挿入した樹木や草花に移らないようにする。

（同類の資料作り例）

1. 作者が気に入ったポーズをした人物一人（主題となる形）を選び、その型紙を作る。その型を、予めかいてある室内や街、その他いろいろな画面に重ねてみながら、構想を練らせる方法がある。
2. 同上のやり方を、O・H・Pでやる方法。
3. 背景の主調色を考えさせる場合は、人物の型紙を数色の色画用紙の上に置き換えながら、背景の色を選択させる方法がある。

【例題7　形と背景の組み合わせ】（高学年向け）

構想画の表し方の一つに、主題となる形に、いろいろな背景を組み合わせ、面白く自由に表現させることがある。

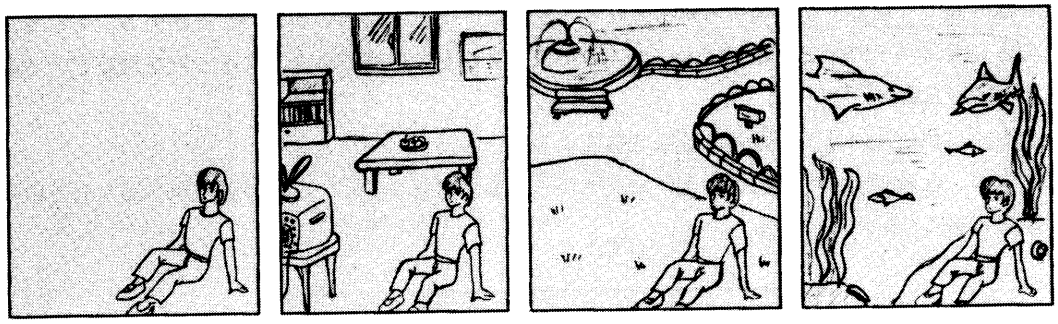
A図には、主題となる人物一人を、背景抜きでかきなさい。

B図、C図、D図にもA図と同じ人物を同一場所に配してみなさい。

その後、B図の背景には室内の様子を、C図の背景には街の様子を、D図の背景には意外な場所（空想的な場所）をそれぞれかき加えなさい。

出来上った四枚の作品をみて、同一人物を配してあるが、背景が違うために、それぞれの作品から特有な内容や味わいが生じることを試しなさい。

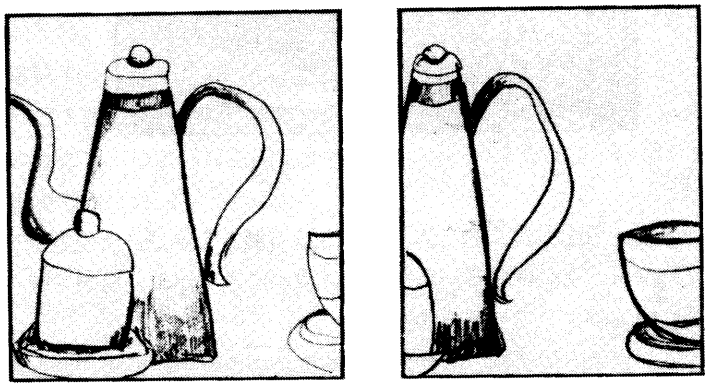
作例



A　人物一人　　B　室内(テレビを見る)　　C　街（憩い）　　D　意外なもの(海の中)

【例題 8　主題の表し方の一例】（高学年向け）

絵の主題が明確なものと、ばらばらな資料。

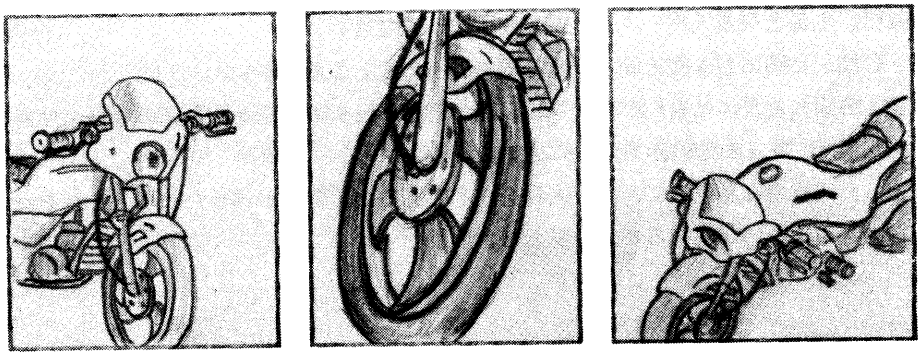


主題が明確なもの　　主題が不明確なもの

【例題 9　視点の変化】（高学年向け）

対象を見る角度を変えてかくと、感じが違うことを理解させる資料をつくりなさい。各自が自由な対象を選びなさい。

作例



目の高さを画面二分の一にして　　目の位置を下から上を見るように　　目の位置を上から下を見るように

【例題10　認識のさせ方】（中学年向け）

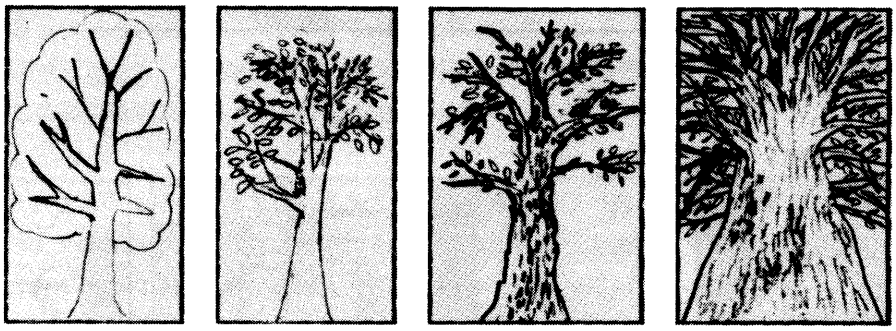
対象を固定概念でかくのではなく、五感を通したり主観的に表現すると、楽しくかけることを理解させる資料をつくりなさい。

A図は樹を固定概念でかいたもの。

B図はよく観てかいたもの。

C図は触って気づいたことをかいたもの。

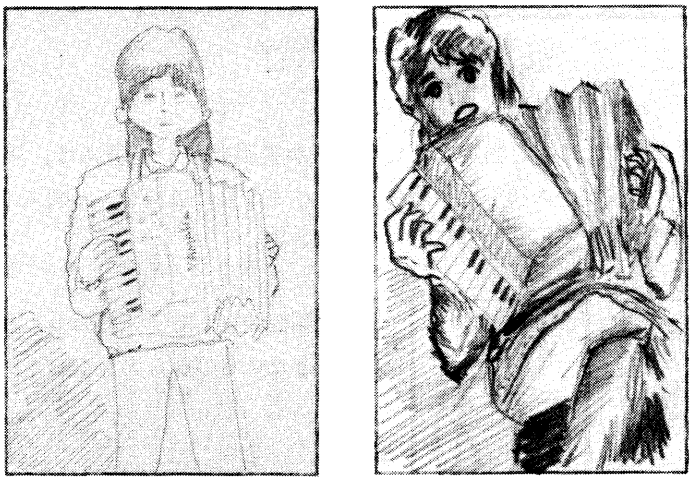
D図は主観的に誇張したり、新しくつけ加えたりしてかいたもの。



A　概念的　　B　よく観て　　C　触って　　D　主観的

【例題11　動　勢】（高学年向け）

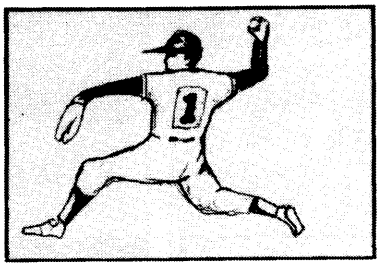
テーマ「アコーデオンを弾く友達」で、その体の動勢や表情がよく表現されている資料と、そうでない資料をつくりなさい。



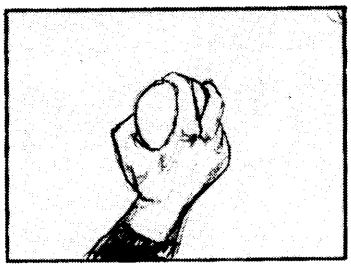
よくない　　よ　い

【例題12　動　勢】（中学年向け）

体全体と部分の動勢を理解させる資料。



全体（ピッチャー）

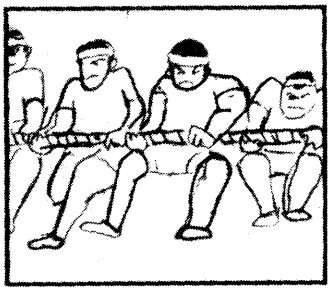


部分（手首）

【例題13　連続感】（中学年向け）

絵の内容が、画面の外にも続いている感じを理解させるために次の資料をつくりなさい。

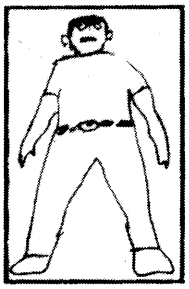
下の図に自由なテーマで、人物が三人半になるようにかきなさい。人物を半身にする場合、その人物の上下左右のどこか一ケ所を選んで、半身にする。人物の欠けた部分の先から感じとられる、画面の広がりや続きを、想像できるものである。



人物三人半

【例題14　筆　順】（中学年向け）

いつも同じ筆順でかくために、固定化された絵しか表現しない子供には、筆順を逆にして打破することがある。A図には、人物を足からかき頭を小さくした資料を、B図には、何時ものように、頭からかき始め、頭が大きくなった資料をつくりなさい。



足から

頭から

類似例として、「顔の中心部から先に」「一番かきたいものから大きくかく」等いろいろある。

【例題15　形の収め方】（中学年向け）

人物一人をかく時に、画面に適切に収めるねらいが理解できない子供に、次の資料を見せて、具体的に理解させる。

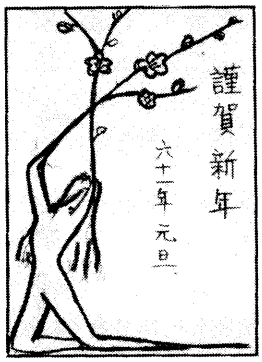
A図には人物を左斜め下に小さくかいてしまった資料。

B図には上半身だけしかかけなかった資料。

C図には全身を適切におさめた資料をつくりなさい。

【例題16　版画における白黒のバランス】（高学年向け）

高学年で年賀状を木版画で作らせたい。色は白と黒の二色とする。自分が決めた主題を表すために、完成作品を想定して、白色と黒色のバランスがよくできた資料例と、そうでない資料例で示しなさい。同じ構図の資料にする。（高学年向き）



線描による原画

白色が多い

黒色が多い

白黒の調和がよい

【例題17　視点の変化】（中学３年生向け）

ある対象を見ながらかく時、目の高さによって対象の形に変化を感じることを、次の実験により確かめなさい。

今、手前に高さ10㎝、直径５㎝の半透明なプラスチックの円柱があると想定してください。その円柱を下記の問１、２、３に従い、それぞれA図、B図、C図に太目の輪郭線で描写しなさい。又、輪郭が見えると想像される部分は実線で、見えないと思われる部分は点線でかきなさい。但し、消しゴムを使わないこと。かき終わったら、図の外側に円柱を見ている方向を→印で示しておきなさい。

問１　上記の円柱が、目の高さの二分の一のところにあると想定してA図にかきなさい。	問２　目の高さが円柱の底面と水平の位置にあると想定して、B図にかきなさい。	問３　円柱の真上約20㎝から真下を見下ろすと想定して、C図にかきなさい。
A図（省略）	B図（省略）	C図（省略）

上記の３問題をした後、今度は実際に上記の円柱を見ながら、問４、問５、問６を読み、それぞれ、A′図、B′図、C′図にかきなさい。

問４　目の高さの二分の一の位置に、上記の円柱に置き、それを見ながらA′図にかきなさい。	問５　円柱の底面を、目の高さと水平になる位置に置き、それを見ながらB′図にかきなさい。	問６　実際に円柱の真上約20㎝から真下を見下ろしてC′図にかきなさい。
A′図（省略）	B′図（省略）	C′図（省略）

問７　この例題の前半では、半透明な円柱の形を見ないで想像してかき、後半は円柱の形を実際見ながらかいてきた。対象を想像してかく場合と、見てかく場合の違いを、自分のかいたA図とA′図、B図とB′図、C図とC′図の内容を一対毎に比較し、気づいたことを下欄に述べなさい。

（解説）　この例題の意図は、対象の形を認識する場合、認識する方法により、認識の度合いに違いがあることを、指導者に理解していただくためである。この例題を行ってみて、対象の形を見てかく方法と、見ないでかく方法とでは、認識の度合いに大きな差が出ることがわかる。

例えば、この例題の問３で円柱を見ないで、想像してかくと、ほとんどの人が一重丸をかいて終わるのである。ところが、問６のように実際円柱を見ながらかくと、円柱の上の面の形を大きな円でかき、その円の中に、円柱の底の面に当たる形を小さな円でかき加えるのである。見ない時は一重丸が、見てかくと二重丸になるのである。実際に円柱の真上20㎝から真下を見おろした時に認知される形は二重丸となるのである。ここでは、客観的な見方をする時の、視点による認識の違いについて述べた。

みるを辞書で調べると、見る、観る、視る等があり、それぞれに意味の違いがある。絵画を創作する時の見るも、色々な表現目標の違いによって、見方が違ってくる。しかし、その特長は、個性的にしかも感情や感覚を通して、対象をみとることである。

写実的表現を好む時期に入った子供たちに、よく見てかきなさいと助言するだけでは効果が薄いのである。対象を漫然と見せるのでなく、形を見とらせる視点や方法を与えるとよい。本例は、見とらせ方の一例である。同じ対象でも、それを見る視点を変えると、対象の形に変化を感じるというこの例題作成のように、工夫した教材を与えれば、子供は対象と積極的にかかわっていくものである。

どのような表現目標を持ったとしても、表現対象を充分認識しないことには、真の表現に迫られないことを、この例題から受け取られるのである。

本例を活用する場合、このまま子供に与えてはならない。何故ならば、絵画制作は作者の創造的表現が大切となるだけに、例題の科学的、透視的、幾何学的認識による表現方法と矛盾があるからである。以上の内容を正しくとらえ、対象を認識させる場合でも、個性的にとらえさせることを忘れないで、応用していただきたい。

資料を制作した学生名

例題１	Ａ～Ｄ図	黒　田　千佳子
例題２	Ａ～Ｃ図	茨　木　妙　子
例題３	作例１－１	鈴　木　正　志
〃	作例１－２	後　藤　美　佳
〃	作例２、３	姫川原　貴　子
例題４	作例１	村　井　由紀子
〃	作例２	細　矢　瑞　紀
例題５	Ａ～Ｂ図	友　野　道　子
例題６	作図	大　島　めぐみ
例題７	作図	細　矢　瑞　紀
例題８	作図	友　野　道　子
例題９	作図	細　矢　瑞　紀
例題10	Ａ～Ｄ図	成　田　紀美子

例題11	作図	相　沢　祐　助
例題12	作図	鈴　木　正　志
例題13	作図	〃
例題14	作図	〃
例題16	作図	竹　山　美和子